EMPEROR

見舞坂歩里丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＥＭＰＥＲＯＲ

【Ｎコード】
Ｎ２４３９Ｊ

【作者名】
見舞坂歩里丸

【あらすじ】
一世を風靡した戦闘機「オオタカ」も、骨董品と呼ばれるようになった時代。関東国防軍防空第一小隊に最新鋭の戦闘機が配備されることになった。が、如月修二の属する第三小隊には関係のない話だ。……と、思っていた矢先、小隊長から驚きの言葉が「新型戦闘機が一機、ウチにも回される事になった」。しかし、第三小隊なんぞに回されるのには、それなりの訳があった……

配備前日（前書き）

初の機械系小説。
訳分からないものだらけですが、多目に見てください
一行につき十二文字設定だと、気持ちよく読めますよ

配備前日

「こちら異常なし。これより帰還します」
快晴の空を旋回して自分の基地に戻る一機の旧型戦闘機〔オオタカ〕。
それはただ一機、悠々と、この広い空を飛んでいた。

「こんなボロ戦闘機でも、昔は最新鋭として前線で戦ってたんだろうな……」
コックピットに取り付けられている機材を眺めながら、オオタカ十三号機パイロット、如月修二［きさらぎしゅうじ］はそうつぶやいた。
「どうかしましたか？先輩」
後部のコックピットから、後輩でありオオタカ十三号機レーダー担当の、大江成実［おおえなるみ］が声をかけてきた。もちろん、通信機を介してだが。
「いや……こんなボロ戦闘機もさ、昔は最新鋭だったんだよなーって……」
修二はそう話した。
「先輩……私も悲しいですよ…。初めて乗った戦闘機が、もう退役になるだなんて」
そう、オオタカは今月限りで退役になる、老機なのだ。現存するのも六機のみ。今二人が乗っている戦闘機は、まさに空飛ぶ骨董品なのだ。
「でも……仕方ないよな……。今となっては戦闘機のレーダーの性能もエンジンの性能もぐんぐん上がってきて、オオタカの出る幕なんてなくなっちまったしな……。コイツの誇れる所っつったら、飛ぶ、古い、エンジンがついている……こんくらいしか無いし」
「でも、複座の戦闘機はオオタカしか無いじゃないですか。これか

らの実践は、全て一人でやれって事ですかね」
「そう……なんだろうな。最近はパイロット志願者も減ってきてるらしいし、犠牲は減らしたいんじゃないのかな……。それより大江。お前、来月から一人乗りだよな？頑張れよ」
「え？そうなんですか？」
「あれ、そうじゃないの？第二小隊から〔エアータイガー〕が下りてくるんじゃなかったっけ」
「〔スカイタイガー〕の事ですか？」
「あら、そんな変な名前だったっけ？」
「エアータイガーの方が変な名前だと思いますが……」
「あ～……あ、そうこうしてるうちに滑走路見えてきた。続きは今度な」
そう言うと修二は着陸に神経を集中させた。

滑走路に一機のオオタカが着陸した。すぐに整備の車両が駆け寄る。プシュー、と音がして、コックピットの風防が開いた。
「よ。二人ともお疲れさん」
中年のおじさんが話しかけてきた。彼はエンジニアの仲川智則［なかがわとものり］。なぜ第三小隊にいるのか分からないほどの凄腕の持ち主だ。
「おう、おっちゃん。今日の整備も最高だったよ」
修二はエンジニア・仲川のことをおっちゃんと呼ぶらしい。
「そうそう。小隊長から話があるそうだから、夕方六時に会議室集合だとよ」
仲川はそう言ってコックピットにはしごを掛けた。
「分かった。ありがとう」
修二はさっさと隊員詰め所に戻っていった。が、成実はオオタカを眺めていた。
「どうしたんだい、成実ちゃん？」仲川は何となく話しかけてみた。

「あ、いえ……もう今月でオオタカとお別れだと思うと、何だか寂しくて……」
成実はそう返す。
「そうか……。そういやそうだったな。今月でこいつが任務で飛ぶことはなくなるんだよな……。しかしまあ、訓練とかでは使われるんだから無駄になるわけじゃないしな」
「……まあ、それもそうですね。それじゃ！」
成実は仲川にそう言うと、修二のあとを追いかけ始めた。
「やれやれ、元気のいいお嬢ちゃんだこった」
仲川は微笑みながら成実の後ろ姿を見ていた。すると
「おやっさん、目がエロいっすよ」
おなじ作業員の進藤進［しんどうすすむ］が茶化してきた。
「うるせぇ！さっさと仕事しろ仕事！」
「ククク……。へーへー」
「へーじゃなくてはいだろ！」
「はいはい」
「はい、は一回！」
「はーい」
「のばすな！」

「ん～……今日もやってるねぇ～」
プレハブ小屋の窓から滑走路を見ている、リーダー中野京平［なかのきょうへい］。そこへ
「如月修二、ただいま生還いたしました！」
「大江成実、おなじく生還いたしました！」
十三号機の二人が詰め所に帰ってきた。
「おかえりー。……まあ、見回りだけで生還できなかったらおかしいんだけどね」

返事をしたのはサブリーダー、小林麻奈美［こばやしまなみ］。成実よりも六つほど年上である。
「あら、まだ鵜堂さんたちは帰ってないんですか？」
修二が部屋を見回し、そう言った。
「ああ、あの二人なら何か怪しい機影を捉えたから確認してくるって連絡して来たみたいだけど」
中野は滑走路を見ながらそう言った。
「あ、帰ってきた。……うわ、煙でてるよ」
リーダーの声に、皆が一斉に窓の外を見た。黒煙を吐きながら、一機のオオタカが滑走路に進入するところだった。

機体が停止すると、すぐさま消火隊がオオタカにかけより、機体の火を消す。どうやらエンジン付近から出火しているようだ。
「あ、どうやら二人は無事みたいだね」
小林がこちらに歩いてくるパイロット二人の影を見てそう言った。
「あの二人のことだ。どうせ加速しすぎてエンジンがいかれたんだろ」
リーダーがそっけなく言う。そう、あの二人、つまり、鵜堂耕介［うどうこうすけ］と秋原拓真［あきはらたくま］は、加速しすぎてエンジンを壊したことが今までにも何度かあるのだ。「ま、とにかく真相を聞いてみましょうよ」
修二はそう言ってコーヒーを二杯入れ始めた。

「生きて帰れて良かったー……」
ドアを開けるやすぐに秋原がそう言ってソファーにぼすんと座り込んだ。続いて帰ってきた鵜堂も同じようにソファーに座った。
「またエンジンぶっこわしたの？」
小林が不機嫌な顔で、帰ってきたばかりの二人に話しかけた。
「いやいや、今回は壊されたんだって」

サブリーダー相手にタメ語で話すのは秋原。と言うのも、二人は同期だからだ。
「壊された？」
小林は怪訝そうな顔でさらに聞いてきた。秋原は横目で鵜堂を見た。すると鵜堂は
「定期見回り中に、怪しい機影を見つけたんです。レーダーに映らなかったので、怪しいと思ってそれを追跡しました」
と話し始めた。
「レーダーに映らないのに、どうやって見つけたの？まさか肉眼で？」
サブリーダーは軽く笑いながら聞いた。
「はい。そうです」
鵜堂は当たり前だというように返した。
「話を続けますね。それで、追跡したんですが向こうの速いこと。で、こっちも全速力出したんですよ。そしたらだんだん間隔が狭まってきてですね、ここは日本国領空内だ、って信号だしたら、向こう突然宙返りしてこっちの後ろに付くと、いきなり撃ってきたんですよ。で、左エンジンに数発食らって、こりゃまずいと思って補助エンジンにも点火して逃げ帰ってきたんですよ。まあ、向こうが深追いしてこなかったのと、ミサイル使わなかったから今俺らは生きてるわけなんですがね」
長話はやっと終わった。
「まあ要するにちょっかいだしたらやり返されたって事か」

中野はそう言った。
「ずいぶん要約しましたね」
成実は苦笑いだ。
「おい、如月。おまえ、さっきの見回りで変な機影見なかったか？」
小林は修二の方を見てそう言った。修二は腕を組み、壁により掛かったまま下を向いている。

「おい、如月。…お～い、如月くーん……。寝るな！如月！」
小林の最後の怒鳴り声で修二ははっと顔を上げた。
「いや、サブリーダーの着替えてるところなんて見たことないですよ」
起き抜けに修二がそう言った。真顔で。
「……何の話？」
小林は呆気にとられた。
「先輩、違いますよ。今日の見回りで不審な機影を見なかったかって」
成実がすかさずフォローする。
「不審な機影ねぇ……見てませんよ」
修二はそう答えた。

午後六時。第三小隊の六人は会議室に集まった。会議室にはすでに大高小隊長がいた。ちなみに大高小隊長は、昔のエースパイロットであり、その腕前は当時最新鋭の戦闘機に名前が付いたほどである。
「あ、小隊長。話って何ですか？」
中野は敬意の感じられないような口調でそう言った。普通は許されないのだが、ここ第三小隊では許されているのだ。中にはしっかり敬語を使う者もいたが、いつの間にかエセ敬語になってしまう。それが、第三小隊の魔力だ。
「話しは聞いてると思うが、第一小隊に新型戦闘機が配備されることになった。それで……」　「第一小隊が使ってた〔白雷〕が第二小隊に下りて、第二小隊の使ってた〔スカイタイガー〕がウチに下りてきて、〔オオタカ〕が退役と」
小林が話をバンバン進めた。
「まあ、そんな所なんだが……実は新型戦闘機が一機、ウチに回されることになった。まあ、試作機だから色々あるんだがな」

その話を聞いた隊員たちの目は爛々と輝いた。
「ま……まあ待て。皆、乗りたいのは分かる。が……そいつがちょっとくせ者でな、脱出装置が無いんだ」
大高がそう言うと、修二と小林以外の隊員の目は死んだ。
「さらに、左エンジンが傾いている」
「不良品じゃないですか！それじゃ、空飛ぶ棺桶ですよ！」

小林が叫んだ。しかし、修二の目はまだ爛々と輝いている。
「にしても、何でエンジン傾いてるんですか？」
冷静になった小林がそう聞く。
「ああ、それだ。実は最近、トライアングル・エンジンとか言う、断面が三角形の装甲の中に、メインエンジン二基と補助エンジン一基を搭載した妙なジェットエンジンが出来てな、それの試運転もかねて今回、トライアングル・エンジン一対を搭載した戦闘機が十機、先行して作られたわけだ。……で、第一号機を組み立てるとき、ほら、エンジンの見た目が正三角形だから、ノズル見ないとどっちが上か分からないだろ？組み立てる奴らはそれに気づかずに組み立てて、残すはコックピットのみ！となったところでやっとミスに気づいたんだが、今更直せない。どうせ博物館行きになると思った作業員たちは、脱出装置を全部外して、空いたスペースに試作の機材を詰め込んだわけだ。まあ、後の九機はきっちり設計図通りに作ったわけだが。それで昨日、その十機を第一小隊に持ってったら、そんな危険なもの受け取れるか！って言われて、一号機だけ受け取ってくれなかったんだ。じゃあ棄てるかってなってた所だった一号機を、すかさず俺がもらい受けてきたってわけだ」
「大高さん、まるで見てきたような口調でしたけど、まさか組み立てに立ち会ったんですか？」　　中野がそう聞いた。
「ま、まあ」
大高の目が泳いだ。
「小隊長、実はエンジンの取り付け方向が違うって、知ってて黙っ

てましたね？」
「いや、あの……」
「そうすれば不良品とはいえ、新型戦闘機がウチに回せると考えたわけですか。まったくもう、あなたって人は」
中野はそう言って笑った。
「さすがはパイロットをまとめるリーダー、察しがいいな」
大高もそう言って笑った。
「まあ、明日には届くだろうから、それまでに乗る奴決めとけよ」
大高は第三小隊のパイロットの顔を見渡した。が、顔を上げているのは一名、修二のみだった。
「……と言っても、乗りたい奴は一人だけ、かな？」
大高はそう言って修二の方を見た。
「じゃ、頼むぞ、如月」
「了解です！」
修二がそう返事をすると、小林が
「正気なの！？脱出装置ついてないのよ？」
と言った。さらに成実も
「そうですよ！それに、エンジンだって傾いてるんですよ？」
と言ってきた。
「いいじゃないですか。別に墜落しなきゃいいんでしょ？それにエンジン傾いてたって、飛ばないとは限らないでしょ？」
しかし、修二はそう返した。
「ま、何かあったら自分が死ぬだけだし、構いませんよ」
大高に向けて、修二はそう言った。その目は、真剣、それ以外に表せる言葉は無かった。

a new fighter plane

ちぎれ雲が所々に居座る空をゆく、大型輸送機〔アマノイワト〕。
その周りには、二機の〔スカイタイガー〕が護衛についている。
今、アマノイワトは六機の〔スカイタイガー〕を第三小隊に運んでいる途中なのである。

突然、一機のスカイタイガーが加速した。どうやら不審な機影を発見したようだ。
スカイタイガーの向かった先には、空に溶けてしまいそうな色をした、一機のとても美しい戦闘機らしき機体があった。パイロットはしばらくその機体に見とれていたが、ふと我に返り、警告信号をだした。すると、その怪しく、美しい飛行機はゆっくりと、日本国領空の外に向かって、空の青色に溶けていった。レーダーにもかろうじて映っていたが、しばらくするとレーダー圏外に出てしまった。
そしてまた、スカイタイガーはアマノイワトの護衛へと戻った。

第三小隊の保有する滑走路から、着陸態勢に入ったアマノイワトの姿が見える。第三小隊のパイロット達は、滑走路の脇からそれを見ていた。
「来たわね。スカイタイガー」
小林が大型輸送機を見ながらそう言った。
「知ってるか？スカイタイガーにはな、いくつか種類があって、中にはホバリングできる奴とか垂直離陸、着陸ができる奴もいるんだぞ」
中野もまた、大型輸送機を見ながら言った。

「へぇ～……知らなかったです」
成実がそう言う。まあ、今までオオタカしか知らなかったのだから無理はない。

アマノイワトが滑走路に降り立った。アマノイワトが完全に停止したのを確認してから、護衛をしていた二機のスカイタイガーも着陸した。
アマノイワトの格納庫から次々とカバーを掛けられた大型のものが出される。

「そう言えば、あれって前に第二小隊の皆さんが使ったやつですか？」
成実がカバーの掛かったスカイタイガーを指差してそう言った。
「そうだよ。でも一機、新品がある」
中野はそう答えた。

車に牽引され、六機のスカイタイガーは第三小隊の格納庫に収まった。
オオタカはすでに第三小隊第二格納庫に移動されていた。
向こうでは、小隊長が護衛についていたパイロットから何やら話を聞いているところだった。

スカイタイガーの輸送が終わり、給油を受けたアマノイワトは、また、深い青に染まった大空に飛び立った。護衛のスカイタイガー二機もそれについて、自分の基地へと戻っていった。
「さて、中野。パイロット達を格納庫に集めてくれ」
大高はアマノイワトを見送りながらそう言った。
「了解しました」
中野はそう返事をすると、各地に散らばる（格納庫やら詰め所やら）

第三小隊のパイロット達を探しに行った。
皆が格納庫に集まってから五分後、小隊長が現れた。
「これが、今日からお前らの愛機だ」
小隊長はそう言うと、おもむろに一機のスカイタイガーに近づき、カバーをバサッと取った。
灰色のカバーの下から、青い機体が姿を現した。
「スカイタイガー……。基本操作はオオタカと大して変わらん。だが、性能はこちらの方が遙かに上だ。それに、一機につき数十億という莫大な金額だ。お前ら、死んでもこの戦闘機だけは壊すんじゃないぞ！」
中野は皆の前でそう言った。
「機体破壊なしでパイロットがどうやって死ぬんだか……」
修二の隣で小林が小さくそうつぶやいた。
「じゃ、そーゆーことで。明日は早速とばしてみる予定だから、今日中にマニュアル頭に叩き込んどけよ。以上、解散」
大高が解散の号令をかけると、パイロット達は配られたマニュアルを抱え、自室に戻っていった。
「あの……小隊長」
修二が声をかけた。
「ん？どうした？」
小隊長は修二の方を向いた。
「俺はどうすれば？」
「ん～……お前もマニュアルでも読んどけ」
小隊長は肩からかけていた鞄の中から、スカイタイガー用の厚さの二倍はあるマニュアルを取り出し、修二に渡すと、格納庫の奥に行ってしまった。
「……重っ」
修二は受け取った新型機のマニュアルを抱きかかえて部屋に戻っていった。

翌朝、格納庫の外には五機のスカイタイガーが横一列に並べられていた。その前に、五人のパイロットも並んでいた。
「パイロット諸君……」
大高小隊長のながーいお話が始まったとき、修二は部屋でマニュアルを枕に眠っていた。

ゴォォォォォ……

「っ！？」
戦闘機の飛び立つ轟音で、修二は目を覚ました。
「……ん？あれは……スカイタイガーか？」
滑走路から飛び立った青い機体を見て、修二はそうつぶやいた。
「ん～……もうチョイ寝るか」
再びマニュアルを枕にしようとしたとき

リリリリリリン　　リリリリリリン

修二の携帯が鳴った。
小隊長からのようだ。
「はい」
『寝てないでさっさと下りてこい！』
「……何で寝てるってわかったんですか？」
『ん？その反応だとどうやらホントに寝てたみたいだな』
「うわ！手口が汚いですよ小隊長！」
『ハハハハハ！……まあ、早く下りてこい。面白いものが有るぞ』
小隊長はそう言うと電話を切った。

部屋から飛び出した修二は、すぐさま廊下にある階段を駆け下り、宿舎から出ると滑走路に向かった。五機のスカイタイガーはもうどこかへ飛んでいってしまったようだ。

滑走路には、見たことのない戦闘機と、大高がいた。
「三分ジャスト。うん、足速いな」
小隊長はそう言うと妙な鞄を修二に渡した。
「ほら、さっさとこれに着替えてこい。五分以内にな」
そう言われたので、修二はダッシュで詰め所に戻った。
しばらくしてから、パイロットスーツに身を包んだ修二が戻ってきた。
「さて……コイツが、これからお前が乗る戦闘機だ」
修二は戦闘機のすぐ前まで連れて行かれた。
灰色の機体、三角形のエンジン。
「どれどれ……」
修二は後ろに回り込んだ。
「ホントだ。エンジンの付け方が違う」
大高が言っていたとおりだった。
「……これホントに飛ぶんですか？」
修二が聞いた。今更不安になってきたようだ。
「さあ、どうかな。でも、やってみたら意外と飛ぶかもよ。それに、自分で乗るって言ったんだし」
小隊長はなんだか嬉しそうだ。
「……じゃあ、もし俺が死んだら……」
「死んだら？」
「宿舎の裏の小屋にいるピーちゃん（にわとり）達に餌やっといてください」
修二はそう言うと、コックピットに入るための梯子に足をかけた。

上っていると、風防のハッチのすぐ下に、青い字で何か書いてあるのに気づいた。
「ん？なんだこれ？E…M…P…E…R…O…R……皇帝？」
「エンペラー。これからお前が飛ばす、世界で唯一機の最新不良品戦闘機だ」
大高が腕を組んでそう言った。

試作一号

修二はコックピットに入ると、マニュアル通りに操作をしてエンペラーの電源を入れた。するとスピーカーからいきなり
『お帰りなさいませご主人様』
と、女性の声がした。
「ぬぉわっ！？何じゃこりゃ！？」
コックピットの中で慌てる修二。
「小隊長、最新鋭って、こんな無駄な機能のことですか？」
「いや、それは多分組み立ての奴らが詰め込んだヤツの一部だろう」
大高は腕を組んだまま修二を見ている。
『ご飯になさいますか？お風呂になさいますか？それとも、飛びますか？』
「小隊長、これどうやって黙らせるんですか？」
「ん？さあ。ミカちゃんに聞いてみたら？確か試作一号機にはミカちゃん搭載されてるらしいから」
「マジですか？ミカちゃん載っけてんのか……」
ミカちゃんとは、特に大型の飛行空母や飛行戦艦に配備される人型のナビゲーションロボットのことである。正式名称はミカではないのだが、修二がミカちゃん（開発者、藤原美香からとった）と呼んでいたら、いつの間にか軍全体に広まった。ちなみにナビゲーションロボットは、現在試験運用中のテスト体として十二体のミカちゃんが稼働している。
「ちなみに、何号ですか？」
何号、とはミカちゃんの事だ。
「決まってるだろ。試作一号」
「試作一号！？何てモンのっけてんすか！ミカちゃん試作一号が載ってるってことは、実戦で殉職確定じゃないですか！」
彼がここまで言うのには訳がある。試作一号のテストとして、演習

時に戦闘機の遠距離ナビゲーションをさせたとき、ミカちゃん試作一号は嘘情報を流し、味方が全滅するという結果を残したからだ。
まあ、そのせいで試作一号は廃棄処分が決定した訳なのだが。
「まったく……廃棄処分が決まった機械が装備されてるなんて、これはゴミ箱か何かかよ……」
「では、修二様は生ゴミ、と言うことになりますね」
突如コックピット内に響く別の女性の声。
「おわっ……いつから起動してたんだよ」
少し動揺する修二。
「いつから、ですか。正確な時刻は記録しておりませんが、私がこの『ゴミ箱』に」
「すまんすまん。ゴミ箱じゃない。俺の愛機だ」
「……修二様の愛機に装備された時から起動しており、常時システムチェックプログラムを走らせています」
「……。とにかく、この機と俺に何か変なこと言ったりしたりすんなよ」
「ええ。しませんとも。修二様がこのエンペラー試作一号機を『愛機』と言ったように、私にとってこの機のパイロット、つまり修二様は『恋人』にあたりますから」
「おいおい、ずいぶんとモテてんなぁ。この優男が」
小隊長が外から何か言ってきた。
「ったく、機械に惚れられてもさっぱりうれしくないですよ」
言い返す修二。
「なっ……！心外です」
ミカちゃんはそう言い返した。
「お前……馬鹿やらかす前と比べるとずいぶん人間臭くなったな」
修二の表情が少し固くなった。
「廃棄処分が決定してから今までずっと技術者にいじくり回されてましたからね」
「……にしても、何だか話してる相手が見えないと変な気分にな

るな。電話してるみたい」
「じゃあ直接会って話します？私もこの機に乗ってることですし」
ミカの声のトーンが少し上がった。
「まあ……そうだろうけど……そりゃシステムとしてだろ」
「ちゃんとボディも乗ってますよ。左側面の白いボタンを二回押してみてください」
修二はどうするか少し迷ったが、とりあえず指示に従ってみることにした。

カチカチ……

ボタンを二回押すと、風防の外側後方からウィーンという、何かが開くような音がし始めた。
「な……何だ！？」
修二は風防から身を乗り出し、後ろをみた。小隊長も興味津々でそれを見ている。

エンペラーの装甲の一部がゆっくり開いていく。そして、その隙間からは、何か……腕が見えた。
「ま……まじかよ……」
プシューと言う音がして装甲の解放が終了した。そして、その中からは、見たこともない少女がゆっくり出てきた。
「……ふう。お久しぶりですね。修二様」
「なーーーー！誰だお前ーー！？」
修二はだいぶ動揺している。
「フフフッ……。外装がずいぶん変わりましたからね」
少女はゆっくり立ち上がると、機体からさっと飛び降りた。

ガシャーン……人型ロボットが少しの高さから飛び降りたらそういう音がするはずなのだが、ミカからはそのような音はしなかった。

滑走路のアスファルトもへこんでいない。
「……こりゃ驚いたな」
小隊長は驚いたような表情でミカを見た。
「一体、総重量は何キロなんだ？」
「はい、ミカ試作一号改は、主要部以外を強化プラスチックやカーボンナノチューブなどで造られているため、総重量は六十三キロとなっております」
大高の問いに、ミカは迷いもせず答えた。流石、ナビゲーションユニットである。
「すげぇ……ほかのミカちゃんは軽く三桁はあるのに……」
修二は信じられないというような顔でミカを見た。どこからどう見ても人間にしか見えない。
「まあ、私とそのエンペラーは今の技術の塊ですからね。それに、戦闘機に載せるユニットが重かったら話になりませんし」
とミカ。もう実は人間だと言われても信じそうだ。
「修二様、惚れました？私に」
「ううん。機体に惚れた」
「なっ！」
本当にショックそうな表情をするのがすごい。さすが、技術大国と言われていただけのことはあるな、修二はそうしみじみと思った。

そんな二人……正式には一人と一台……の会話を聞きながら、大高はこのエンペラー試作一号機を引き受けたときの技術者の言葉を思い出していた。
『このエンペラーに搭載されているミカ・改は、自分で物事を考えたりする……つまり、機械生命体なんです。でも、問題があるんですよ。と言うのもですね、あのシステムは、ミカのＯＳの対ウイルス実験をしていて、数種類のウイルスを同時にミカにけしかけた時に発生した、いわばバグみたいなものなんですよ。ですから、も

しかしたら稼動中に暴走したりするかもしれませんよ』

「ま、いいや。ミカちゃんはそこら辺で待っててくれ。俺はひとっ飛びしてくるから」　　修二はエンペラーの再起動を開始した。が、再起動しない。

「あら？……まさか」

「正解です。その機は私が接続されてないと起動しませーんあしからずー」

髪の長い、そして、修二よりも……多分他のパイロットよりも……背の低く、まな板な少女はそう言った。

（にしてもあれは……設計上あれが一番都合がいい形なのか？それとも、技術者の趣味的な……？）

修二は既に別の議題を見つけていた。

「ふぅ……。とにかく、テスト飛行してみるから早く戻ってくれ」

少しうんざりしたように言う修二。

「はいはーい」

が、ミカはそんな修二を気にせず、軽快に機体によじ登ると、さっきまでいたハッチ内に戻り、接続を開始した。

コックピットにある照準器兼モニターにコードが映る。

『機体異常ナシ。発信可能』

「機体に異常はみられません。発進可能です」

文字が表示されるとほぼ同時にコックピット内にミカちゃんの声が響いた。

「嘘ついてないだろうな？」

修二は念を押した。

「大丈夫です。私を信じてください」

「それにしてはモニターに映ってる字が違ってないか？」

「えっ？」
「ほら、『発進』が『発信』になってる」
「そ……修二様の見間違いです。私はそんなミスをみすみす見落とすようなまねはぷはははは！」
「おいおい、自分で言ったんだから最後まで言い切れ。途中で笑うなよ…。あくまでも機械だろ？」
「……っ！！……くっ……！あはははははははははは！！」
「うるせぇ！！いつまで笑ってる気だよ！！」
「……ふう。あー可笑しいくくっ」
「オカシイのはお前だよ！それよりほら、さっさと発進させてくれ」
修二は少し苛立った。まあ、無理もない。

「じゃ、まず最初は私アシストしないんで」
ミカはそう忠告してくる。
「ああ、そっちの方が助かるよ」
修二は一度ため息をつくと、機を動かし始めた。
「お、オオタカよりも何か軽いな。さすが最新鋭だ」
「ま、実際は質量的に言えばオオタカの方が格段に軽いんですけどね。軽く感じるのは出力アップの賜物です」
「ふーん……ま、とにかく飛ぶか」

無事、エンペラーは滑走路から飛び立った。
「……ふう、爆発はしなかったか。よかったよかった」
小隊長は、飛び去るエンペラーの姿を見ながらそう呟いていた。

ソウルドッグ

第三小隊にスカイタイガーが配備されてから三日。早くも正式な任務が第三小隊に命令された。

「皆、知っていると思うが、我々は今回、海を越えて米国へ空輸する重要器機の護衛に当たる。尚、本作戦には第一、第二小隊も参加する」

大高が第三小隊メンバーの前にでてそう言った。

「輸送の援護か……。結構きついな」

リーダーの中野がそうつぶやく。輸送機は大型で遅いため、敵の格好の標的になるのだ。

「尚、輸送は先日完成した新型飛行戦艦『高天原（タカマガハラ）』のテスト飛行も兼ねて行う・・・・・らしい」

らしい、と言うのは、小隊長も人から聞いた話だからである。

「しつもーん。スカイタイガーは艦載できるんですか？」

小林が手を挙げた。

「多分できる」

大高は即答する。

「あ、じゃあエンペラーはどうですか？」

修二も手を挙げた。

「お前は馬鹿か。第一小隊もお前とほぼ同じヤツ使ってるんだから載るに決まってんだろ」

「なーるほど」

修二はぽんと手をたたいた。

「まあ、第三艦載機発進口には専用の射出機がないから、お前のには専用の補助エンジンくっつけることになるけどな。じゃ、解散」

小隊長はそう言うと小隊長室に戻っていった。

第三小隊の戦闘機乗り達は、とりあえずプレハブ小屋に集まった。
「・・・・・ん？一人多いぞ？」
部屋に入ってから、最初に言葉を放ったのは鵜堂だった。
「ほんとですか？」
と、成実は人数を数え始める。
「えっと、中野さんに小林さんに鵜堂さんに秋原さんに先輩に私に・・・・・・・・あなた誰？」
成実の指し示す指の先には第三小隊のメンバーではない少女がいた。
それを見て修二は
「えー・・・・・話せば長くなるんだけど・・・・・」
と、ミカがここにいるいきさつを事細かに話し始めた。

「ふーん・・・・・。だいたいは納得したけどさ、ロボットに髪っているの？結構リアルにできてるし」
小林がミカの長い髪を後ろで結びながらそう言う。ミカは
「この髪は私の中にあるコンピューターを電磁波などから守るためにあるそうです。雷受けても大丈夫だって、開発の人は言ってましたよ」
と返した。いきなり馴染んでいるようだ。
「ところで隊長。輸送の護衛ってありますけど、一体何を運ぶんですかね」
修二が口を開いた。中野は窓から外を見ながら
「さあな。ま、護衛が必要って事はよほど重要なものなんだろうな」
そう答えた。
「ま、とにかく俺達は護衛するだけなんだから、深いことは知らなくていいさ。で、修二。悪いがコーヒーいれてくれ」

「はいよっ」
「あ、俺も」
と秋原。
「同じく」
小林。
「私もお願いします」
成実。
「俺もな」
鵜堂。
「私もですよ」
ミカ。
「おめーは飲めねーだろうが！」

六人がコーヒーを飲んでくつろいでいると、そこへ大高が現れた。
「お前ら、大変だ！」
「ど、どうしました！？」
第三小隊に緊張が走る。
「実は・・・・・・」
大高の額に汗がにじむ。
「小隊長室のコーヒーが切れた」
「なんだ～・・・・・」
小林がそう言うと、第三小隊は一気にダレた。

翌朝・・・・・
「全機、滑走路に配置しました。いつでも発進可能です」
進藤がプレハブ小屋のドアを開け、そう報告してきた。
「よし、じゃ、総員着替えて滑走路に集合な。そろそろ高天原もこ

の上通る頃だしな」
何故かいる大高がそう言った。
「あれ、まさかこれって・・・・・・」
修二が苦笑いした。
「そうだ。お前の苦手なアレだ」
アレ、とは飛行中の飛行戦艦の格納庫に着艦する事である。
「大丈夫ですよ。修二様のアシストはしっかり行いますから！」
ミカは修二の不安をよそにそう言ってニコッと微笑んだ。
「おお、高性能だな」
鵜堂は微笑むミカを見てそう言った。

「でけー・・・・・・・・・」
成実は第三小隊基地の上を通過する飛行戦艦『高天原』を見てそう言った。
ほかの皆は既に戦闘機に乗り込んでいるというのに。
「ほら、お前もさっさと乗り込め」
大高が成実を軽くしかる。
「小隊長はどうなさるんですか？」
「私か？私はここでおまえたちの帰りを待つとするよ」
「じゃあ何でパイロットスーツ？」
「気づかれたか」
「バレバレですよ」
「私も高天原に乗りたくてな、護衛には参加しないが取りあえず余ってるスカイタイガーで飛ぶことにした」
「へー・・・」
「ほら、さっさと発進しろ。置いてかれるぞ」
それから三十秒後、四機のスカイタイガーと一機のエンペラー、遅れて二機のスカイタイガーが滑走路から、空の要塞と呼ばれる高天原へと飛び立った。

修二は編隊を組んで飛んでいる。
「空の要塞って、昔はプロペラ機が言われてたんですよね？」
『らしいな』
返事をしたのはリーダー中野。
「それが、今の時代になるとほんとにこんな馬鹿でかい要塞になるんだから、時代ってのは凄いもんですねぇ」
『何変なこと言ってんの』
サブリーダーが口を挟む。
「いやいや、何となくそう思っただけです」
『さてはあんた、帰りたいとか思ってんじゃないでしょうね？』
「あー帰りたいー」
『残念。もう着艦みたいよ。じゃ、また格納庫でね』
通信はそこで切れた。今から着艦らしい。ちなみに修二は一番最後だ。何故かというと、下手だからである。
「あー・・・ホント帰りたい」
「まあまあ。私が居るじゃないですか」
コックピットに流れるミカの声。
「そうだな。ミスったら巻き添えにしちまうしな」
「やめてください。私結構修理費とか高いんですから」
「自分の心配しかしないのか・・・・・」
ロボットって冷たいんだなと、修二はしみじみと感じた。

六機のスカイタイガーがスムーズに着艦していく。残るは修二のエンペラーだけだ。

「ほらほら、早くしろー」
リーダーから通信が入る。
「ちゃんと消火設備も整ってるぞー」
「ちょ、火災発生を前提にしないでください！」
まあ、修二には前科があるので消火隊の待機は妥当な判断なのだが。
「おい、早くしろ。高天原が加速できないだろ！」
リーダー中野がしびれを切らしてそう言った。
「分かりましたよ・・・・。ではエンペラー、これより着艦します。
メインエンジン出力ダウン」
修二はエンペラーの推進力を弱めた。
「補助エンジン点火」
トライアングルエンジンの、一番小さなノズルから高温のジェットが噴き出す。
「着艦」
エンペラーからランディングギアが下りる。そのままエンペラーはハッチに進入、無事着艦する事ができた。
「こちら第三戦闘機格納庫。ハッチ閉め願います」
大高が備え付けの電話にそう話しかける。たぶん、艦橋と繋がっているのだろう。
エンペラーが着艦してから少し経つと、開いていたハッチがゴゴゴゴと重そうな音を立てて閉まった。

一行は高天原の中を歩いて回っている。大昔、海に浮かぶ戦艦で甲板を一周するのに一時間かかったやつがあるらしいが、この高天原はたぶん五時間ぐらいかかるのではないだろうか。いや、そんなかかんないね。
「あっ！あれこの間出来たばっかりの『きじはら』じゃないっすか

！」
鵜堂が通路の窓から見える護衛の飛行戦艦を見ながらそう言った。
今回、高天原は『かすが級飛行巡洋艦』三隻と『エトール級飛行戦艦』、『すばる級飛行駆逐艦』に周りを囲まれるようにして護衛されている。演習でも見ないような光景である。
「先導しているのは一番艦の戦艦『ソウルドッグ』、本艦の右側にいるのが二番艦の駆逐艦『きじはら』、左右斜め後方についているのが二隻一対の『たちばな』と『さくら』、この通路と反対側にいるのが『しののめ』となっています。はい」
一行を案内していた兵士が軽くそう説明した。
「え？ソウルドッグって・・・・・米国からも護衛来てるんですか？」
鵜堂が話に喰らい付いた。
「ええ。今回は高天原の性能を見たいということで米国から一隻きてます。まあ先頭にいますけど実際はお客さんみたいなものですね」
「へ～・・・」
楽しそうに喋る二人を置いて、一行はまた通路を進みだした。
「あれ、リーダー、案内の人置いて行っちゃっていいんですか？」
大江が後ろを振り向きながらそう言う。
「ま、良いんじゃないかな。別に」
特に気にするような気配も無く中野は歩いている。
「・・・・・先輩、本当に大丈夫ですかね？」
隣を歩いている如月にも聞いてみる大江。
「ま、良いんじゃないかな。別に」
如月もまったく同じように答えた。

排除命令

「ちょっとちょっとちょっと！置いていかないでくださいよ～・・・・」
しばらくして、ちょっと文句を言う鵜堂と案内役の兵士が走ってきた。
「置いていかないでって・・・・。置いてかれるほうが悪いんでしょ？」
小林はそう冷たく言い放つと、またツカツカと歩き始めた。リーダーよりも前を歩く、サブリーダー。
「いいのか？サブリーダーがリーダーの前を歩いてて」
大高が中野にそう声をかける。中野は落ち着いた様子で
「別に問題ありませんよ。それより、小隊長がサブリーダーの後ろを歩いていると言うことの方がどうかと思いますけどね」
と言いニヤッとした。
「おっと、皆さん一旦止まってください」
案内役の兵士が小林の前に出て、一行の足を止めた。
「この部屋が第三小隊の皆さんの部屋となりますので、しばらくこの部屋で待機していてください。大高小隊長はこのまま艦橋までご案内いたします」
兵士はそう言うと、大高を連れてまた歩き始めた。第三小隊の戦闘機乗りたちが廊下に取り残される。
「・・・・・・・いいなぁ、艦橋」
大江がボソッとつぶやいた。
「ま、とにかく入りましょうよ」
秋原が先頭で用意された部屋に入る。続いてサブリーダー小林。
「おお、広いですね！第三小隊の詰め所とは全然違いますね！」
ミカ試作1号は部屋の広さに驚いたようだ。だが実際は大して広さは変わっていない。

「あーあ。飛行戦艦の癖に部屋から外が見られないなんてつまんねーの」
備え付けの椅子に腰掛けると如月はそう言ってため息をついた。
「しょうがないですよ。窓なんてあったら危ないですし。そんなに外が観たいんなら旅客機に乗れば良いじゃないですか」
大江が隣に座った。
「そうですよ。あくまでも戦艦なんですから」
反対隣にミカが座る。
「おおう、モテモテだな修二よ」
小林が真ん中の如月を茶化す。こういうことが好きな人なのでこれは仕方が無い。
「ええ、モテモテですよ。話は変わりますがそろそろサブリーダーも結婚したほうが良いんじゃないですか？だってもう三十五ですよね？」
「まだ二十八だ！」
如月の言葉に少々むきになる小林。他人をいじるのは好きだが自分がいじられるのは嫌なようだ。
「まあまあ落ち着いてくださいよ。怒ると早死にしますよ」
「あっそれフラグじゃね？」
如月の何気ない言葉にフラグを感じ取る秋原。
「残念だったな小林。お前はそう長くないぜ。フラグ立ったし」
「えっ・・・」
秋原の言葉がなかなか効いたようでサブリーダーはそれから黙ってしまった。
「・・・・ちょっと悪いことしたかな・・？あんなにしおらしくなるとは思ってもみなかった」
小さな声で秋原は隣に座っている鵜堂にそう言った。

そのころ大高は高天原の第一艦橋に来ていた。
「おお・・・・さすがは最新鋭の戦艦だ・・・」
見たことも無いような機械が所狭しと配置され、三百六十度視野モニターが前後左右の映像を映し出している。
「この艦は従来のものとは異なり、艦橋が艦の内部に設計されている為、艦橋に攻撃が来にくい造りになっています。一応第二艦橋として艦上部に従来型のものも設置されていますが」
案内役の兵士はあたかも自分のことのようにそう言う。
「それはすごい・・・・・。ところで、君の名前を聞いていなかったが」
大高は案内をした兵士にそう言った。
「私ですか・・・・。私は第一航空輸送大隊所属、加藤亮平（かとうりょうへい）と申します」
案内役の兵士は加藤と名乗った。
「第一空輸大隊の加藤・・・・？お前、昔第一小隊にいた加藤か？」
聞き覚えのある名前に大高が反応する。
「おや、ご存知でしたか。でも、まあ、それもずいぶん昔の話ですよ」
「知ってるも何も、演習とはいえオオタカ一機で七七式戦車八両を撃破したのは後にも先にもお前ただ一人だからな」
「あれはたまたまですよ」
加藤は薄く笑いながらそう答える。
「やっぱり、戦闘機なんか飛ばしてるよりも、ゆっくり輸送機を操縦してるほうが楽しいですよ」
「・・・・・そうか。まあお前の選んだ事だからな。私は何も口を出すつもりは無いよ」
大高はそう言うと、艦橋のモニターに目をやった。

「艦長！きじはらがミサイル発射管を開きました！」
一人の兵士の声が艦橋に響く。その途端、高天原の艦橋モニターに赤の縁取りが現れた。
「何っ！？一体どういうことだ！直ちにきじはらと通信しなさい！」
空軍には珍しい女性艦長、橋本が艦橋に通る声でそう指示を飛ばす。
「既に試みていますが応答ありません！」
「何と・・・・・！！ミカ！これは一体どういうことなの！？」
艦長が、艦隊のミカシステムを統率しているミカ三号に問う。しかし、ミカ三号は橋本の方を振り返りもせず、ただ黙ってコネクションシートに座っていた。
『橋本艦長！これは一体どういうことだ！キジハラが砲門を開いたぞ！』
ソウルドッグのハングドマン艦長から高天原の艦橋に直接通信が入った。
「こちらでもまだ自体を把握していません。とにかく、直ちにきじはらから離れてください！」
艦長がそう言った時だった。
「きじはらからミサイル発射！五秒後にソウルドッグに命中します！」
モニターには、艦首ミサイル発射管から放たれた幾筋ものの煙がソウルドッグに向かって飛んでいっているのが映っていた。
『クソッ！撃ってきやがった！・・・こちらソウルドッグ！これよりキジハラの迎撃にかかる！』
その通信の後すぐにソウルドッグの艦尾から光の束が放たれるのが映ったが、そのすぐ後にミサイルがエンジンに命中した。そのすぐ後、ソウルドッグのエンジン部分が大爆発を起こし、艦の高度がだんだんと下がっていくのがモニターに映されていた。
「なんてことだ・・・・」
大高は言葉を失った。きじはらはこの艦隊唯一の駆逐艦だ。機動力も攻撃力も申し分ない。それに、飛行戦艦は構造上エンジン部を強

化することが出来ないため、後方からの攻撃にはすこぶる弱いのだ。
「艦長！本部から通信です！」
誰かがそういった後すぐに、通信用モニターに見慣れた軍部のお偉いさんの顔が映った。
『先程、きじはらの所属する関東第二基地が壊滅状態にあると連絡が入った。生存者の証言によると、きじはらは船員が乗り込む前に突如ひとりでに起動し、基地を破壊してから飛び立ったそうだ。つまり今、君たちの横を飛んでいるきじはらは全くの無人艦であり、危険な暴走戦艦でもある。直ちに撃墜してくれ』
「ったく、連絡が遅いんだよ！全艦、直ちにきじはらを撃墜せよ！右舷砲塔、きじはらに照準を合わせろ！」
橋本がそう命令をかけた。すると今度は
「艦長！大型のミサイルが本艦に向けて発射されました！」
「くっ！可能な限りミサイルを撃ち落とせ！それと、第一小隊を全機発進させろ！」

きじはらから放たれたミサイルのうちのいくらかは、激しい弾幕をかいくぐり高天原の右舷に命中した。衝撃で艦全体が大きく揺れる。
「な・・・なんだ！？今度は！！」
鵜堂は持っていたコーヒーをこぼさないように注意しながら壁に手を付いた。
「今のは近いな・・・・・・。ここも危ないんじゃないか？」
そういいつつも持っていたコーヒーを啜るリーダー中野。すると突然
『緊急事態発生！緊急事態発生！第一、第二、第三小隊のパイロットは至急各格納庫へ集合せよ！繰り返す！第一、第二・・・・』
緊急を知らせる艦内放送が響いた。
「かくかくのうこだって・・・・・・・・ククク」
秋原が突然怪しく笑い始めた。おそらくツボだったのだろう。

「ほら秋原！笑ってないで行くわよ！！」
小林はそう言って全員をたたせると、駆け足で格納庫まで向かうように指示を出した。

『こちらソウルドッグ！エンジン損傷で高度を保てないためやむを得ず離脱する！』
「了解しました。今、貴艦の護衛に戦闘機部隊を発進さますので、ゆっくりと高度を落としてください。第一小隊、発進！！」
艦橋に響く橋本艦長の声。その声にあわせて操作係が格納庫のハッチの開閉ボタンを押した。ハッチが開ききる前に飛び出すエンペラー。一機、二機、三機と順番になおかつ素早く発艦していく。が、四機目が発進した瞬間、きじはらの左舷機関銃口が第一艦載機発進口に向けられた。そして五機目。今、艦を離れたその瞬間、五機目のエンペラーは弾丸の雨にさらされ機体を引き裂かれると、そのまま黒煙を吐いて回転しながら海面に向かって墜落していった。パラシュートは、開かなかった。

『こちら第一格納庫！エンペラーが一機撃墜されました！ここからの発進は不可能です！！』
整備士からの通信が第一艦橋に響いた。
「・・・・・・・・・・・・・・」
艦長の額に汗が流れる。その間にもモニターには、ソウルドッグや高天原、後方に居たさくらにミサイルを発射したり主砲を撃ったりするきじはらと、きじはらの兵装を一つ一つつぶしに掛かっている第一小隊の四機のエンペラーが映っていた。
「艦長」
大高がそっと声を掛けた。
「・・・・・・なんでしょうか」
なるべく平静を保っているフリをしながら橋本が振り返った。

「この艦は・・・・・・・一体、アメリカに何を届けようとしているのですか？」
大高の質問に、一瞬、一瞬だが艦長の表情が強張った。
「・・・・・さあ。それは私にも分かりません。ただ、軍事上の重要な物資、とだけ聞かされています」
「もしかして、ロボット兵器だったりするんですかね？しかも自律式の」
「ですから・・・」
「いえいえ、これは単なる中年の推測ですよ。どうぞお気になさらずに。・・・・・・・・さて、では私はお邪魔でしょうから、自分の居るべき場所に戻るとします」
大高は意味ありげにそう言うと、高天原の艦橋を後にした。
艦橋の戸が閉まるのを見届けてから、橋本艦長は近くにいた兵士を呼び寄せた。
「・・・・・アイツは何かを掴んでいるに違いない。もしも・・・・・万が一だが・・・・・もしも、第三小隊（あいつら）が貨物室に入ったら、この戦闘のどさくさに紛れて始末しろ」
「・・・了解しました」
兵士はそう返事をすると、艦橋から出て行った。

「大高小隊長、あなたは・・・結構まずいことに首突っ込んでるかも知れないですよ！！」
先ほどの兵士はそうつぶやくと、被っていた帽子を脱いで手に持ち、通路を第三艦載機発進口へ向けて走っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2439j/

ＥＭＰＥＲＯＲ

2011年10月6日05時47分発行